

日本は確かに島国である。だから、その歴史と国民の意識において、海がとてつもなく大きな役割を果たしている(もつとも文学においては、全くといっていいほど果たしていない)。しかし、島国には二つの側面がある。島を要塞として見るか、牢獄として見るかだ。生来そとに目が向いていて独立心旺盛な人間たちは、圧倒的に要塞としての視点から見てきた。そこで、まわりを取り囲んでいる海を、強大な力の源と見るのだ。

自然が自ら築いたこの砦、

疫病や戦の手から守らんと……

銀色の海にはめ込まれた貴い宝石、

城壁ともなり、

また館を守る堀ともなる、

恵まれぬ国々の妬みを阻むために……

シェイクスピアがこうしたせりふを書いているあいだも、イギリスの冒険家は、大洋という恵み深い公道にのった、既知の世界の半分を包含する一大帝国を築くのに忙しかつたわけだ。

これとは対照的に、その歴史を通して日本は牢獄的ものの見方をしてきた。内側に陰気な目を向ける習慣と、閉じ込められ、囲われ、数限りない恩恵を奪われているという思いがひとつになったものの見方だ。日本人にとって、海は冷酷で気まぐれで危険な障壁だった——津軽ではその障壁をはつきりと感じる。この海は、現に冷酷で気まぐれで危険なのだ。自分たちの国民性の短所と考えているものを説明しようとするとき、日本人はしばしば“島国根性”という言葉を掘り起こす——狭く、排他的な、断固として内向したものの考え方を差している場合が多い。海は獄舎の扉であり、公道ではない。これを渡っていくというのは、混沌をもてあそぶことであり、未知という恐るべき鬼とたわむれることなのだ。海は、味方でもなければ、その恵みをよるこんで提供してくれるものでもない。つねに用心してかからねばならぬ敵であり、その贈り物が惜しみなく与えられることはさらさらない。腕力と祈りで海からもぎとってくるのだ。日本の海辺の町にいき着くたびに、ぼくは海を見るかす(西洋人の愛する眺望)宿屋や民宿を探したがむなしかった。そのたびに、どこか裏道にひっそりと建つ宿で間に合わせねばならなかった。船ではなくバスのみミナルが見えるようなところだ。生涯東京に住んでいても、太平洋に面した湾の上にいることを忘れていられる。この大都会が、それだけうまく大洋に背を向けおおせているということだ。日本という国家は、海を恐れているように見える。ぼくが、気まぐれな海岸

に沿った町々より津軽内陸の小さな町々のほうがずっと性に合っていると感じるのも、おそらくそのせいだろう。また太宰が、「点景人物の存在もゆるさ」ず、「風景にも何も、なつてやしない」打ちのめされた外ヶ浜と比較して、あれだけの凶作に見舞われている平野部に何らわびしさもおぼえなかったのも、同じ理由によるのだろう。

こんなことを考えながら、僕は岩木山をめぐり、ふたたび海の見えるところに出た。

アラン・ブース 『津軽』より